

福井県大野市に走る東西アクセント境界線について

松倉 昂平

キーワード: アクセント 福井方言 方言境界線 垂井式 内輪式

要旨

福井県大野市東部ではいわゆる垂井式アクセントと東京式（内輪式）アクセントの分布域が境を接することが知られているが（平山 1953 など）、この境界線は、新潟県糸魚川市から三重県の揖斐川河口に向けて本州を横断し日本語諸方言をアクセント面で東西に二分する方言学上重要な境界線の一部をなす。本研究では、大野市東部のアクセント分布を再確認するとともにこの境界を挟んで隣接する2種のアクセント体系の記述・比較を行う。なお福井・石川・岐阜の三県境に程近い当地には語彙・文法面の重大な等語線も多数走り（例：コータ／カッタ〈買った〉境界線）、3県の方言（ひいては西日本方言と東日本方言）の漸移地帯としての様相も認められる。

1. 研究の目的・概要

福井県大野市は福井県の東端、九頭竜川の上流域に位置する人口約31000人（2022年時点）の市である。現在の市域の西半が2005年11月以前の旧大野市、東半が旧大野郡和泉村にあたる。市域の大半を険しい山地（両白山地）が占め、人口は北西部に開けた約10km四方の大野盆地に集中している。市の南部（真名川上流域）と東部（九頭竜川上流域）の山間地は、1960年代に相次いだ自然災害やダム建設の影響で急速に離村が進み、現在は広大な無住地帯（人口希薄地帯）が広がっている。無人化して久しいこれらの地域においては、生え抜きの調査協力者を見つけ出すこと自体がすでに困難になりつつある¹。

大野市内のアクセント分布を明らかにした先行研究（平山 1953, 1954）によると、現在の市域内には系統的に大きくかけ離れた2種のアクセント体系が分布している。そのうちの1つが中心市街地を含む旧大野市域に分布するいわゆる垂井式アクセント、もう1つが岐阜県から旧和泉村域にかけて県境を越えて連続分布する内輪式アクセントである²。詳細

¹ 人口流出に拍車をかけた災害とダム建設を列挙してみる（【 】は主な影響地域）：北米濃地震【打波川流域】（1961年8月）；第2室戸台風（1961年9月）；三八豪雪（1963年1月～2月）；九頭竜ダム本格着工【九頭竜川・石徹白川流域】（1965年）；奥越豪雨【真名川流域】（1965年9月）；真名川ダム着工【真名川流域】（1967年）。

特に九頭竜ダム建設に伴う集団離村ではほとんどの住民が岐阜県・愛知県に転出したため、当該地域（九頭竜川上流域）出身者の追跡が難しくなっている。

² 「垂井式」の呼称はこの種の体系を岐阜県垂井町で最初に発見し「垂井アクセント」と呼んだ服部（1930）に由来する。平山（1953, 1954）では「勝山・大野式音調」という呼称を用いている。「内輪式」の呼称は金田一（1977）の「内輪東京式」に基づく。平山（1953, 1954）で「石徹白式音調」と呼ぶ体系は今に言う内輪（東京）式にあたる。

は5節で後述するが、ここでは1, 2拍名詞の類別語彙³のアクセントを例に両体系の相違を示す(1)。

(1) 垂井式と内輪式の比較⁴ (1, 2拍名詞を例に)

| 類 語例 | 垂井式 (旧大野市方言) | | 内輪式 (旧和泉村方言) | |
|-------|-----------------|----------------|-----------------|----------------|
| | | | | |
| 1 蚊 | 0 | [カー [カカ° | 0 | [カ カ[カ° |
| 2 葉 | 1 | [ハ]ー [ハ]カ° | 1 | [ハ [ハ]カ° |
| 3 芽 | 0 | [メー [メカ° | 1 | [メ [メ]カ° |
| 1 庭 | 0 | ニ[ワ ニ[ワカ° | 0 | ニ[ワ ニ[ワカ° |
| 2・3 川 | 1 | [カ]ワ [カ]ワカ° | 2 | カ[ワ カ[ワ]カ° |
| 4 船 | 0 | フ[ネ フ[ネカ° | 1 | [フ]ネ [フ]ネカ° |
| 5 窓 | 1 | [マ]ド [マ]ドカ° | 1 | [マ]ド [マ]ドカ° |

どちらの体系もアクセント核の有無と位置が区別される点は共通するが、類と型の対応(各型の所属語彙)が大きく食い違う。さらに(1)からは1拍名詞の母音が長呼されるか、2拍2型(語末核型)の有無、といった共時論的特徴の相違も窺える。

旧市村境に沿って走る両体系の分布境界は、近畿周辺に分布する中央語と同系統のアクセント諸体系と、東日本に広く分布するいわゆる東京式のアクセント諸体系を隔てる「東西アクセント境界⁵」の一部をなしている(図1)。語彙・文法面の特徴から西日本方言と東日本方言を区分する東西方言境界線(通称糸魚川・浜名湖線)の存在がよく知られているが(牛山 1953)、東西アクセント境界線はそのアクセント版であって、アクセント面から日本語諸方言を東西に二分する、方言学上重要な境界線である。筆者は、平山(1953, 1954)以来70年の時を経て今、改めてその境界付近のアクセント分布を確認しておく意義はあると考え、大野市東部においてア

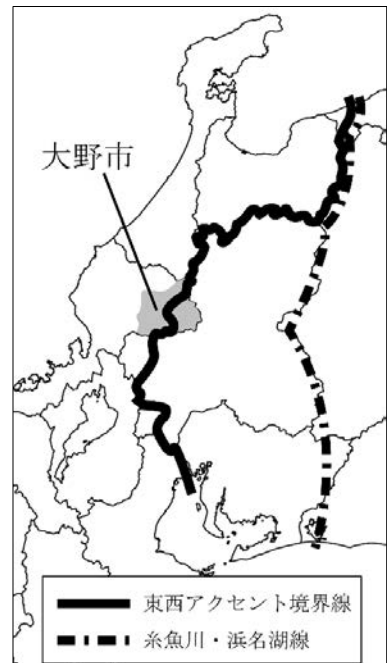


図1. 東西アクセント境界線

³ アクセント研究における「類」(あるいは「語類」)とは、現代諸方言と文献資料を比較して得られる音対応(型の対応)に基づき再建される、共通祖語において同じアクセント型を有していたと推定される単語群を指す。金田一(1974)の分類では1拍名詞に3つ、2拍名詞に5つの語群(類)が設定されている。

⁴ 0は無核型、1以上の数字は語頭から数えてn拍目に核がある型を表す。[はピッチの上昇、]は下降を表す([○]○はHL、○[○]はLH)。また軟口蓋鼻音[h̠]をカ°、キ°、ク°...のように表記する。

⁵ 東西アクセント境界線は新潟県糸魚川市青海一寺地間を発し(平山 1955)、富山・長野県境、富山・岐阜県境、石川・岐阜県境を経て大野市内を横切り、岐阜県西濃地方を南下し(柴田 1950, 金田一 1973 など)、三重県の揖斐川河口に至る。最初の発見は三重県の揖斐川河口(桑名ー長島間)から北へ向けおよそ揖斐川付近に沿って濃尾平野上にアクセント境界が走ることを突き止めた服部(1930)に遡る。

クセント調査を実施した。調査の主な目的としては、境界線の確定に加え、垂井式と内輪式が接触する状況下にあって中間的・漸移的な体系が生じていないか確認することと、両体系の詳細な記述を行うことが挙げられる。

また当地は福井・石川・岐阜の三県境に接し、各県の 3 方言（奥越方言・白峰方言・郡上方言）が接触する地域にあたり、語彙・文法面での等語線も多数走ることが予想される。結論に触れると、石川県境に接する打波川流域には石川県方言（白峰方言）と、岐阜県境に接する九頭竜川最上流域には岐阜県方言と共通する語彙・文法形式が多数入り込んでいるが、それらの等語線の位置はアクセントの境界線とは必ずしも一致しないことが明らかになっている。

2. 先行研究

大野市内のアクセント分布は、嶺北地方全域のアクセント分布を調査した平山（1953, 1954）の中でおおよそ明らかにされている。市内全域（主要な川筋全て）を満遍なくカバーする約 13 地点が調査され、平成の大合併以前の旧大野市域には平山の言う「勝山・大野式音調」、旧和泉村域には「石徹白式音調」が分布することが示された（前者が本稿で言う垂井式、後者が内輪式に相当する）。両体系の分布境界は九頭竜川流域においては現在の大野市西勝原（垂井式）―大野市板倉（内輪式）間に走ることが明らかになったが、両地点の間にもまだ集落はあり境界線が正確に確定してはいなかった。また各体系の記述は簡略的なもので、3 拍以下の短い名詞・動詞・形容詞の音調と類別体系（類と型の対応）しか取り上げられていない。勝山・大野式音調（垂井式）に関しては 3 拍名詞への言及もない。判明していたのはほぼ 1, 2 拍名詞の類別体系のみと言える状況で、より長い語のアクセントを明らかにした上で共時的な体系分析と系統的な位置付けを行うことが課題として残されていた。

柴田（1958）は東西方言境界線について概説する中で大野市内の方言分布にも言及している。柴田（1958）の調査によると、旧大野市と旧和泉村の市村境付近にはアクセントの境界線（垂井式―内輪式境界）に加えて、語彙・文法面で日本語を東西に区分する 2 つの等語線（コーターカッタ〈買った〉境界とカルーカリル〈借りる〉境界）が走るようである。このうち前者はアクセント境界線と一致せずやや岐阜県寄り走り、九頭竜川流域においては現在の大野市朝日（コータ）―大野市下半原（カッタ）間に境界が引かれることが示されている。

3. 調査地点・調査方法について

本稿では、東西アクセント境界線付近（大野市東部）の 8 地点においてアクセント・基礎語彙・基礎的な文法事項に関する現地調査を実施した結果を報告する。調査地点の位置関係と周辺の地理を図 2 に示す。



図 2. 調査地点の位置

(2) 調査地点一覧⁶

| 集落 | 地区 | 話者の生年・性別 | 調査時期・備考 |
|-----------------------------------|----|---------------|---------------------|
| 1 西勝原 <small>にしきどはら</small> | 五箇 | 47m, 51m, 53m | 2022 年 8 月 |
| 2 下打波 <small>しもうちなみ</small> | 五箇 | 32f | 2022 年 8 月 |
| 3 上打波 (中洞) <small>なかぼら</small> | 五箇 | 38m | 2022 年 7 月～9 月、11 月 |
| 4 上打波 (小池) <small>こいけ</small> | 五箇 | 50m | 2022 年 9 月 |
| 5 下山 <small>しもやま</small> | 和泉 | 40f | 2022 年 7 月 |
| 6 朝日 <small>あさひ</small> | 和泉 | 64f | 2023 年 3 月・文法調査のみ |
| 7 川合 <small>かわい</small> | 和泉 | 44f | 2022 年 7 月 |
| 8 下半原 <small>しもはんばら</small> | 和泉 | 40f | 2022 年 7 月、11 月 |

調査対象地域は大野市の東半を占める大野市五箇地区（旧大野郡五箇村）及び大野市和泉地区（旧大野郡和泉村）である。大野市街から東へ 10～40km 離れた山中にある。

五箇地区を含む旧大野市域と和泉地区の間は標高 1523m の荒島岳や険しい溪谷（九頭竜峡）に隔てられており、かつては人の往来も制限されていた。このような地理的条件もあって、和泉地区（特に岐阜県境に近い地域）では、岐阜県側との経済的な結びつきが強かった。

打波川流域の上打波・下打波両地区では、焼畑に適した土地を求めて母村から離れた山地に第二、第三の生活拠点（出作り小屋）を構える、出作りと呼ばれる生活形態が見られ

⁶ 大字上打波には 6 つの集落（小池、中洞、中村、桜久保、木野、嵐）があるが、集落間の方言差が大きいため、小池集落と中洞集落を別地点として扱っている。話者の生年は西暦下 2 桁、m は男性、f は女性を表す。

た。この出作りは、打波川流域の北に接する石川県白峰地区でも盛んに行われており、近世以降、白峰の人々はしばしば国境を越えて越前側（福井県側）で出作りを行うことがあった（橘 1997）。大野市上打波の小池集落は、そのような白峰から出作りに来た人々が幕末頃に定住して成立した集落である。このように石川県境に接する地域では古くから出作り制度を介した白峰方面との人的交流があったに違いなく、実際にその歴史を反映して、打波川流域の方言には石川県白峰方言と共通する特徴が多く認められる（4.2 節）。

なお下打波、上打波（中洞）、上打波（小池）、下半原はすでに無人化しており、現在は
大野市内の他地域にお住まいの方にお会いした。

4. 方言分布

筆者の調査で確認された大野市東部における方言差（アクセント境界線、等語線）を言語地図にまとめて示していく。全ての調査項目を地図化する紙幅はないためここでは言語体系の根幹に近い特徴を中心に挙げる。

4.1. 音韻（アクセント）

まず図 3 に 1, 2 拍名詞の類別体系の分布（すなわち垂井式と内輪式の分布）を示す。九頭竜川流域におけるアクセント境界は西勝原（垂井式）－下山（内輪式）間に走ることが確認された。東西アクセント境界線は旧市村境に一致している。境界付近に両者の中間的な体系は存在せず、一方から他方への影響もほぼ認められなかった。純粋な垂井式と純粋な内輪式が境を接している。

垂井式内部また内輪式内部のバリエーションは少ないが、動詞アクセントにやや重大な食い違いが見られる。図 4 に 1 類動詞の 3 拍過去形（「押した」「上げた」）のアクセントの方言差を示す。垂井式方言のうち上打波の 2 地点では 1 型、西勝原と下打波では無核型に対応している。これは西勝原・下打波において 3 拍過去形のアクセントを無核型の基本形（オ[ス、ア[ケ° ル）と一致させる類推変化が発生した結果と考えられる⁷。基本形が有核型の[オ]ル〈居る〉の過去形は西勝原・下打波

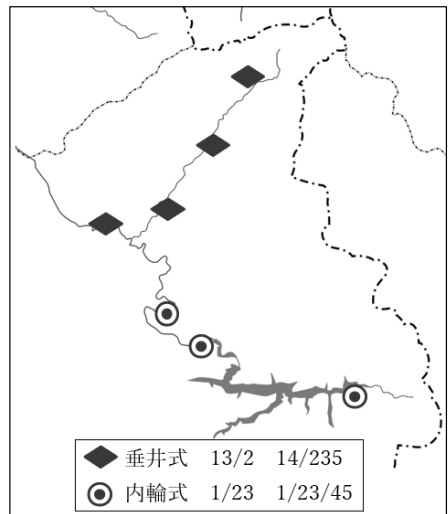


図 3. 垂井式と内輪式の分布

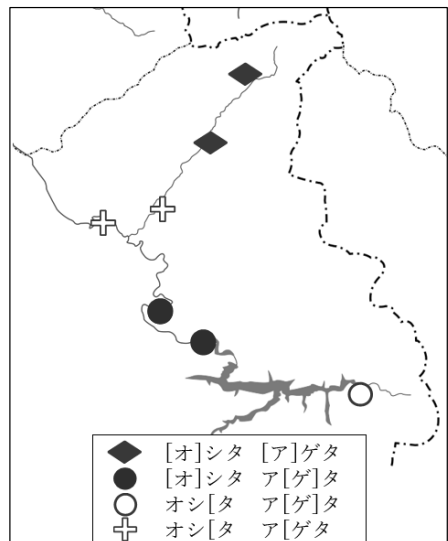


図 4. 「押した」と「上げた」の音調

⁷ 2 拍や 4 拍の過去形にはこの類推変化が発生していない（例：ネ[ル〈寝る〉]に対して[ネ]タ、ア[カ° ル〈上がる〉]に対してア[カ°]ッタ）。

でも無核化せず1型（[オ]ッタ）で現れることが傍証になる。

当地の内輪式方言において1類動詞の3拍過去形は基本的に2型に対応するが、2拍目が促音である場合方言により3型または無核型（例：ノッ[タ〈乗った〉）、2拍目が母音が無声化した拍である場合1型または無核型（例：[オ]シタ or オシ[タ〈押した〉）で現れる⁸。

4.2. 文法・語彙

いくつかの主要な文法形式にも地域差が見られる。図5には進行相の形式（「雨が降っている」の方言訳）の分布を示す。主としてトル形が分布する当地から見て西には嶺北方言のテル形、北には白峰方言の Chol 形、東には岐阜県方言の Yor 形があり、それぞれが当地に侵入した結果4種類の形式が近接する複雑な分布を生み出している⁹。

ノダ文の形式も地域差が大きい（図6）。打波川流域（下打波・上打波）では白峰方言と同じく準体助詞を介さず動詞にコピュラ「ヤ」が直接後接しかつるに終わる動詞の場合はクッチャ〈来るのだ〉、シマレッチャ〈生まれるのだ〉のようにル=ヤ→ツチャという音変化を生じる。九頭竜川最上流の下半原でも準体助詞が介在しない。準体助詞を介さない形が当地におけるノダ文の古形であろうか。下流方面（西勝原～朝日）には準体助詞を介する新形（シマレンノヤ、クルンヤロ）が進出している。

1人称代名詞は五箇地区（と和泉地区の下山）でウラ、和泉地区でオレが主流である。打波川流域最上流の小池集落では古くはギラという語形も聴かれた（白峰方言と同形）。

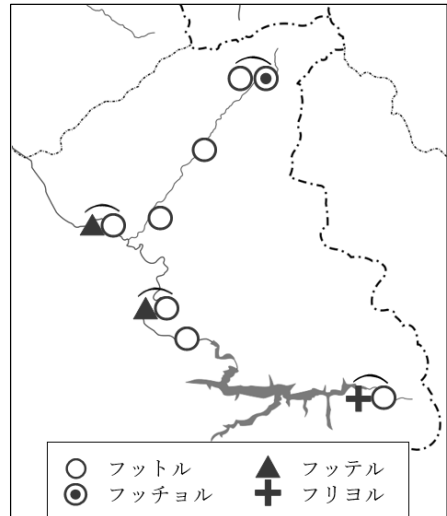


図5. 進行相「(雨が)降っている」

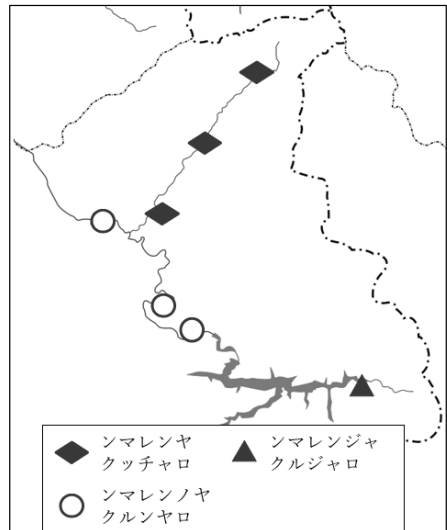


図6. ノダ文「(娘)生まれないのだ」「(誰)来るのだろう」

⁸ 「乗った」は下山・川合で3型（ノッ[タ、ノッ[タ]トキ〈乗った時〉）、下半原で無核型（ノッ[タ、ノッ[タ]ト]キ）、「押した」は下山・川合で1型（[オ]シタ）、下半原で無核型（オシ[タ、オシ[タ]ト]キ〈押した時〉）。なお「時」は各地で1型（[ト]キ）。

⁹ Yor 形を有する下半原方言とこれを有さない他方言との違いは形式面にとどまらず、アスペクト体系そのものが大きく異なる。下半原では、「降る」「歩く」のような主体動作動詞はYor形・トル形ともに進行相 (a)、「死ぬ」のような主体変化動詞はYor形が直前相 (b)、トル形が結果相を表す。「開ける」のような主体動作客体変化動詞はYor形が進行相、トル形が進行相または結果相（客体結果の継続）を表す (c)。

(a) クマカ° {アルキYor/アルイトル} 〈熊が歩いている〉

(b) キンキ° ヨカ° シニYorワ 〈金魚が死にかけている〉

(c) タローカ° マド アケトル 〈太郎が窓を開けている〉 or 〈窓が開けてある（開けたのは太郎）〉

以上に挙げた少数の例からも下打波・上打波方言と白峰方言の類似性が窺われるが、両方言の共有特徴としては他にも、サ系指示詞¹⁰（サーナ〈そんな〉）、場所格ナ（ヤマナ ウチ〈山にある家〉）、所有格カ°（ウラカ°モン〈私の物〉）、疑問詞疑問文専用の文末詞ナラ¹¹（ドコ イクナラ〈どこへ行くの〉）、人称制約のない授与動詞クレル（ウラカ° コーテクレルワイ〈私が買ってあげるよ〉）等々、多数挙げられる。

下半原方言には岐阜県方言との共通点が多く確認されている。今回の調査地点の中では下半原が唯一コータ／カッタ等語線の東側にある（例：「買ってしまった」は下半原でカッテマッタ、他地点でコーテモタ等）。また岐阜県・愛知県方言に特有の形容詞オソカ° イ〈恐ろしい〉の分布域にも含まれる¹²。

以上 4 節では大野市東部における方言接触の概況（福井、石川（白峰）、岐阜各県方言の漸移地帯としての様相）を示した。打波川流域方言はアクセントが福井県大野方言と共通ながら文法・語彙に白峰方言の影響が見られる。和泉地区の下山・朝日・川合方言はアクセント面では岐阜県側に属しながら文法・語彙は福井県方言と共通する部分が多い中間的な方言である。

5. アクセント体系の記述

5.1. 上打波中洞方言（垂井式）

最も調査量の多い¹³上打波中洞方言を代表例として、旧大野市域に広がる垂井式アクセントの基本的な特徴を報告する。

5.1.1. 名詞アクセント

(3) に 1~4 拍名詞に区別されるアクセント型を一覧する。

¹⁰ ただし白峰方言ではシャーナ・ハーナ〈そんな〉とも（新田 2005: 79）。周辺方言の語形はソンナ〜ホンナ〈そんな〉。なお「こんな」「どんな」は上打波でカーナ、ダーナ、白峰ではキャーナ・カーナ、ジャーナ・ジャンナ（新田 2005: 78, 91）。

¹¹ 上打波の桜久保集落で用いられる（中洞の話者のご教示に拠る）。小池集落では r>j の変化を経たナヤ（ダイカ° イクナヤ〈誰が行くの〉）。中洞集落ではこの文末詞を使わずコピュラで結ぶ（ドゴエ イクセ〈どこへ行くの〉）。

¹² オソガイの分布域は『日本言語地図』第 42 図を参照。「怖い」の方言訳として他地点ではオトロシー（西勝原、中洞、川合）、コワイ（下打波、下山、川合）、ウザコイ（中洞、小池）という回答を得ている。

¹³ アクセント・基礎語彙の調査を通して 1~4 拍名詞約 1200 語程度のデータを得ている。

(3) 上打波（中洞）方言の名詞アクセント¹⁴（網掛けは語例僅少の型）

| 型 | 1 拍 | 2 拍 | 3 拍 | 4 拍 | |
|---|---------------|------------------------|-----------------------|--------|-------|
| 0 | [メー [メカ° | カ[サ カ[サカ° | サ[ガナ サ[ガナカ° | ニ[ワトリ | (芽 笠) |
| 1 | [ハ]ー [ハ]カ° | [ヤ]マ [ヤ]マカ° ~ヤ[マ]カ° | [イ]ノチ [イ]ノチカ° | [カ]ミサマ | (葉 山) |
| 2 | | [ムゴ]]~[ム]ゴ ム[ゴ]カ° | ア[タ]マ ア[タ]マカ° | カ[ミ]ナリ | (婿) |
| 3 | | | (オッ[カ]]) (オッ[カ]カ°) | カ[ミノ]ケ | (母・妻) |
| 4 | | | | (語例未見) | |

アクセント核の有無・位置が区別され n 拍語に $n+1$ 通りの型が区別される体系である。ただし語末核型は基本的には 2 拍語にしか安定的に存在しない。3 拍 3 型の唯一の例としてオッ[カ]] (母・妻) を挙げたが、2 拍目が促音である 2 型語 (○[ッ]○型) が確認されておらず、2 拍目が促音か否かという条件で 2 型と 3 型は相補分布している可能性が残る¹⁵。4 拍 4 型の語例は未見である。2 拍 2 型は (3) に示した通り 2 拍 1 型との対立が紛れる発話が多く型の特定には少々手間を要するが、単独言い切り形が[○○]]に実現すれば 2 型、助詞付き形が[○]○カ° に実現すれば 1 型、あるいは[○]○カ° が許容されなければ 2 型、といった基準で判別は可能である。通時的な視点に立てば、2 拍 2 型（語末核型）が 1 型に合流する途中過程（合流直前の状態）を目撃しているのだと考えられる。従来、大野市周辺の垂井式アクセントは語末核型を欠く体系と報告されてきたが（松倉 2022: 148）、実は所属語彙が極端に少ないだけで、調査語数を増やせば中洞方言と同様に語末核型の語例が見つかる可能性はある。

[ミン]ナ (皆)、[ダイ]コン (大根) のように特殊拍¹⁶に核が置かれる語例があるため（かつ[オ]ンナ (女)、[ダ]イク (大工) などと対立）、アクセント核を担う単位はモーラである。限られた条件下ではあるが長音拍や促音拍にも核が置かれ得る (5.1.3 項)。

5.1.2. 助詞類の振舞い

名詞に付く助詞類（助詞、コンピュータ）には無核型に対し高く付く「無核形式」と名詞に対して常に低く付く「低接形式」の 2 種類がある (4)。属格助詞「の」は原則として次末核を消去するが 2 拍 1 型語には一部その作用を受けない語がある (5)。おそらく分節音の構造

¹⁴ ガ、ギ、グ...は有声軟口蓋破裂音 [g] を表す。本方言ではカ行子音 (/k/) の形態素内部かつ母音間での有声化が盛んに生じる。○]]は拍内下降を表す ([○○]]は HF)。

¹⁵ オッ[カ]]は語末母音が長いオッ[カ]ーと併用（オッ[カ]]はオッ[カ]ーの語末母音が短縮した形）。

¹⁶ 長音、撥音、促音、二重母音 (ai など) の第 2 要素。それ自身で音節を形成しない自立性の低いモーラ。

や意味からは予測できない、語彙的に決まる振舞いである。

(4) 上打波（中洞）方言の助詞類の分類

| | |
|------|---|
| 無核形式 | エ（方向格）、オ、カラ、カ°、ニ（以上格助詞）、ク° ライ、ダケ、ヤッタ（コピュラ過去形）、ワ（主題） |
| 低接形式 | サエ、シカ、デモ、ナラ、マデ、モ、ヤ（コピュラ）、ヤロ、ヨリ |

(5) 属格助詞「の」の振舞い

| | | |
|---------|-------|--|
| 1 拍 1 型 | 無核化せず | [ハ]ノ〈葉〉、[ヒ]ノ〈日〉、[ヤ]ノ〈矢〉... |
| 2 拍 2 型 | 無核化せず | ム[ゴ]ノ〈婿〉、ア[ギ]ノ〈秋〉、ア[サ]ノ〈朝〉... |
| 2 拍 1 型 | 無核化する | ヤ[マ]ノ〈山〉、イ[ギ]ノ〈雪〉、ア[メ]ノ〈雨〉... |
| | 無核化せず | [ア]ガノ〈赤〉、[カ]ケ°ノ〈陰〉、[サ]ルノ〈猿〉、[ツ]キ°ノ〈次〉... |
| 3 拍 2 型 | 無核化する | ア[タマ]ノ〈頭〉、イ[トコ]ノ〈従兄弟〉、ク[スリ]ノ〈薬〉... |
| 3 拍 1 型 | 無核化せず | [イ]ノチノ〈命〉、[カ]ブトノ〈兜〉、[ミ]ドリノ〈緑〉... |

5.1.3. 動詞アクセント

(6) に 2, 3 拍動詞の 4 つの活用・派生形（基本形、否定形、過去形、トル形¹⁷）のアクセントを一覧する。（調査の範囲内では）語末核型が見られない点、形態論上の要請に応じて長音や促音を含む特殊拍に核が置かれることがある点が名詞とは異なる。

(6) 上打波（中洞）方言の 2, 3 拍動詞アクセント（ここでは [ŋ] をガ、ギ、グ...で表記）

| 類 | 語例 | 基本 | 否定 | 過去 | トル |
|---|-----|---------|----------|----------|-----------|
| 1 | 寝る | 0 ネ[ル] | 0 [ネン] | 1 [ネ]タ | 1 [ネ]トル |
| 2 | 出る | 0 デ[ル] | 0 [デン] | 1 [デ]タ | 1 [デ]トル |
| 1 | 置く | 0 オ[ク] | 0 オ[カン] | 1 [オ]イタ | 1 [オ]イトル |
| 1 | 乗る | 0 ノ[ル] | 0 ノ[ラン] | 1 [ノ]ッタ | 1 [ノ]ットル |
| 2 | 書く | 0 カ[ク] | 0 カ[カン] | 0 [カイ]タ | 2 [カイ]トル |
| 2 | 取る | 0 ト[ル] | 0 ト[ラン] | 0 [ト]ッタ | 2 [ト]ットル |
| 3 | 居る | 1 [オ]ル | 1 [オ]ラン | 1 [オ]ッタ | — |
| 1 | 上げる | 0 ア[ゲル] | 0 ア[ゲン] | 1 [ア]ゲタ | 2 ア[ゲ]トル |
| 2 | 投げる | 1 [ナ]ゲル | 1 [ナ]ゲン | 0 ナ[ゲ]タ | 2 ナ[ゲ]トル |
| | できる | 1 [デ]キル | 2 デ[キン] | 1 [デ]キタ | — |
| 1 | 上がる | 0 ア[ガル] | 0 ア[ガラン] | 2 ア[ガ]ッタ | 2 ア[ガ]ットル |
| 2 | 下がる | 1 [サ]ガル | 2 サ[ガ]ラン | 1 [サ]ガッタ | 2 サ[ガ]ットル |
| 3 | 歩く | 0 ア[ル]ク | 0 ア[ル]カン | 2 ア[ル]イタ | 2 ア[ル]イトル |

¹⁷ 音便形語幹に接辞 -tor-u が付いた語形。進行相や結果相を表すアスペクト形式。

2 拍動詞の基本形・否定形はほぼ無核型に統一されているが唯一[オ]ル・[オ]ラン〈居る・居らん〉のみが 1 型で現れる。2 拍五段動詞の過去形には類の区別に対応した 1 型 ([オ]イタ) と無核型 ([カイタ) の対立が見られる。注目されるのはトル形の音調で、[オ]イトル〈置いている〉/[カイ]トル〈書いている〉のような同一音節内部での核の位置対立が生じる¹⁸。[コ]ートル〈買っている〉/[オー]トル〈会っている〉、[ノ]ットル〈乗っている〉/[トッ]トル〈取っている〉のような長音や促音を含む音節でも同様である。[ノ]ットルは第 1 音節内部に鋭い下降が生じる音声 ([nót.tò.rù])、[トッ]トルは第 1 音節内部に軽い上昇が生じる音声 ([tót.tò.rù]) で音声的にも話者の意識上も対立ははっきりしている。

3 拍動詞の基本形・否定形には無核型と有核型の対立が見られるが、基本形・否定形を無核型に統一しようとする傾向が 3 拍動詞にも及んでおり、無核型を併用する有核動詞が多い¹⁹。下流方面の西勝原・下打波方言ではこの傾向がさらに進み 3 拍動詞の基本形もすでに無核型にほぼ統一されているようである (ナケ° ル、デキル、サカ° ルも無核型)。

デキル〈できる〉は 3 拍一段動詞の中で唯一基本形・過去形ともに 1 型で現れる。否定形が 2 型で現れる背景は不明である。下打波方言でもデ[キ]ン (2 型) を記録しており単なる誤り・個人言語ではないと思われる²⁰。

5.2. 下半原方言 (内輪式)

九頭竜川源流・岐阜県境に程近い下半原方言を代表例として、旧和泉村方言の内輪式アクセントの基本的な特徴を報告する。下流方面の下山・朝日・川合方言との間には文法・語彙面の等語線が多数走るが、アクセントに関しては和泉地区内の方言差は少ない。

5.2.1. 名詞アクセント

(7) に 1~4 拍名詞に区別されるアクセント型を一覧する。

(7) 下半原方言の名詞アクセント

| 型 | 1 拍 | 2 拍 | 3 拍 | 4 拍 | |
|---|-------------|----------------|------------------|------------------|----------|
| 0 | [カ カ[カ° | ハ[コ ハ[コカ° | サ[カナ サ[カナカ° | ニ[ワトリ ニ[ワトリカ° | (蚊 箱) |
| 1 | [ハ [ハ]カ° | [マ]ド [マ]ドカ° | [カ]ラシ [カ]ラシカ° | [オ]ーカミ | (葉 窓 辛子) |

¹⁸ 接辞-トルは語幹の末尾拍に核を置くことを要求するいわゆる *pre-accented* の形態素と解釈できる。

¹⁹ 3 拍一段動詞の調査結果を列挙すると、下りる、閉じる、伸びる...等は 1 型のみ、飢える、閉める、立てる、舐める...等は 1 型と無核型の併用。基本形の音調に揺れがある (無核型を併用する) 場合でも過去形にはそのような型の併用は見られない (飢えた、閉めた、立てた、舐めた...は無核型のみ)。

²⁰ 下打波では、デ[キル (0 型) ~[デ]キル (1 型)、デ[キ]ン (2 型)、[デ]キタ (1 型)。

| | | | |
|---|---------------|------------------|-------------------|
| 2 | ヤ[マ ヤ[マ]カ° | イ[ノ]チ イ[ノ]チカ° | カ[ミ]サマ (山) |
| 3 | | ア[タマ ア[タマ]カ° | サ[カズ]キ |
| 4 | | | カ[ミナリ カ[ミナリ]カ° |

アクセント核の有無・位置が区別され n 拍語に $n+1$ 通りの型が区別される体系である。2 拍から 4 拍語に至るまで語末核型の語例が豊富に見つかりまた所属語数が僅少な型がない点が、前節の上打波中洞方言（垂井式）とは異なる。特殊拍が核を担う例は名詞には確認できていないが動詞には[イー]ダス〈言い出す〉、[オイ]タ〈置いた〉等の 2 型語を確認している。無核型と語末核型は単独言い切り形で対立が中和する。

5.2.2. 動詞アクセント

(8) に 2, 3 拍動詞の 5 つの活用・派生形（基本形、否定形、過去形、トル形、ヨル形²¹）のアクセントを一覧する。

(8) 下半原方言の 2, 3 拍動詞アクセント²²（ここでは [ŋ] をガ、ギ、グ...で表記）

| 類 | 語例 | 基本 | 否定 | 過去 | トル | ヨル |
|---|-----|---------|----------|----------------------|-----------|-----------|
| 1 | 寝る | 0 ネ[ル | 0 [ネン | 2 ネ[タ | 0 ネ[トル | 2 ネ[ヨ]ル |
| 2 | 出る | 1 [デ]ル | 1 [デ]ン | 2 デ[タ | 0 デ[トル | 2 デ[ヨ]ル |
| 1 | 置く | 0 オ[ク | 0 オ[カン | 2 [オイ]タ | 2 [オイ]トル | 2 オ[キ]ヨル |
| 1 | 乗る | 0 ノ[ル | 0 ノ[ラン | 0 ノッ[タ ²³ | 3 ノッ[トル | 2 ノ[リ]ヨル |
| 2 | 書く | 1 [カ]ク | 2 カ[カン | 1 [カ]イタ | 1 [カ]イトル | 1 [カ]キヨル |
| 2 | 取る | 1 [ト]ル | 2 ト[ラン | 1 [ト]ッタ | 1 [ト]ットル | 1 [ト]リヨル |
| 3 | 居る | 0 オ[ル | 2 オ[ラン | 0 オッ[タ ²³ | — | — |
| 1 | 上げる | 0 ア[ゲル | 0 ア[ゲン | 2 ア[ゲ]タ | 2 ア[ゲ]トル | 3 ア[ゲヨ]ル |
| 2 | 投げる | 2 ナ[ゲル | 2 ナ[ゲン | 1 [ナ]ゲタ | 1 [ナ]ゲトル | 1 [ナ]ゲヨル |
| | できる | 2 デ[キ]ル | 2 デ[キン | 1 [デ]キタ | — | — |
| 1 | 上がる | 0 ア[ガル | 0 ア[ガラン | 0 ア[ガッタ | 4 ア[ガット]ル | 3 ア[ガリ]ヨル |
| 2 | 下がる | 2 サ[ガル | 3 サ[ガラ]ン | 2 サ[ガ]ッタ | 2 サ[ガ]ットル | 2 サ[ガ]リヨル |
| 3 | 歩く | 2 ア[ル]ク | 3 ア[ルカ]ン | 2 ア[ル]イタ | 2 ア[ル]イトル | 2 ア[ル]キヨル |

²¹ 語幹に接辞 -(i)jor-u が付いた語形。オル〈居る〉との複合動詞に由来する。進行相や直前相を表すアスペクト形式。

²² 無核型と語末核型の判別はトキ〈時〉を後接させて行った。例えば無核型のネ[ルト]キ〈寝る時〉、ノッ[タ]トキ〈乗った時〉等に対して語末核型であればネ[タ]トキ〈寝た時〉のように語末境界に下降が生じる。

²³ 下山、川合ではノッ[タ]トキ〈乗った時〉、オッ[タ]トキ〈居った時〉でノッ[タ〈乗った〉とオッ[タ〈居った〉がともに 3 型。

2 拍五段動詞の過去形・トル形には同一音節内部での核の位置対立が生じている（[オイ] タ〈置いた〉／[カ]イタ〈書いた〉など）。基本形が無核型の 2 拍五段動詞の過去形は、2 拍目が長音、撥音、二重母音のイである場合 2 型、促音または母音が無声化したシである場合無核型になる。

旧和泉村方言でもオル〈居る〉はアクセント上例外的な振舞いを示し、基本形が無核型でありながら否定形が有核型（2 型）で現れる唯一の例となっている。

ヨル形はオル〈居る〉との複合動詞に由来しておりそのアクセントも一般の複合動詞アクセント規則に基づき決まったものと考えられる。本方言の 2 拍+2 拍複合動詞には、シ[リア]ウ〈知り合う〉、ト[リア]ウ〈取り合う〉のように前部要素の型にかかわらず後部要素に核が置かれる語がある一方で（おそらくこちらが現在生産的な型である）、ナ[キ]ヤム〈泣き止む〉／[フ]リヤム〈降り止む〉のように前部要素に核が置かれかつその位置が前部要素の型を反映して決まるものがある（前部要素が無核動詞ならば 2 型、有核動詞ならば 1 型）。ヨル形のアクセント（ナ[キ]ヨル〈泣いている〉／[フ]リヨル〈降っている〉）は後者のタイプの複合動詞と一致している。

5.3. 各型の所属語彙（類別語彙との対応）

1, 2 拍名詞における類と型のおおよその対応は (1) に示した通りである。ここからは興味深い問題を含む 2 拍 5 類名詞と、3 拍名詞の類別体系を取り上げる。

5.3.1. 2 拍 5 類名詞（上打波中洞方言）

中洞方言において 2 拍 5 類名詞は大部分が 1 型に属し、少数、2 型語と無核型の語が混在する。そして 5.1.2 項で助詞「の」の振舞いについて述べた通り、1 型語は助詞「の」が付くと無核化する語と核を保持する語に分かれる。(9) に全データを挙げる。

(9) 2 拍 5 類名詞の所属型（右横の数字は助詞「の」が付いた時の音調）

【無核型】 汗、桶、縦、鍋、鮎、蛇、^ま繭

【2 型】 秋 2、朝 2、^く虻 2、^ほ蜘蛛 2、婿 2

【1 型】 藍 1、青 1、赤 1、兄 1、雨 0、^あ鮎 1、井戸 1、陰 1、黍 1、黒 1、鯉 1、声 0、琴、
鯉、猿 1、白 1、足袋 1、露、鶴 1、春 0、^へ蛭、前 1、窓 0

(9) に挙げた通り、1 型の 5 類名詞はその大半が助詞「の」を後接させても無核化しない。無核化する語は 19 語中 4 語（雨、声、春、窓）にとどまる。

一方、5 類と同じく 1 型に対応する 2 拍 2, 3 類名詞は、その大半が助詞「の」を後接させると無核化する。目下得られている全データを示す (10)。

(10) 2 拍 2, 3 類に属する 1 型語 (右横の数字は助詞「の」が付いた時の音調)

【2 類】 石 0、音 0、紙 0、川 0、蟬 1, 0、次 1、橋 0、人 0、冬 1、町 0、村 0、雪 0

【3 類】 網 0、池 0、芋 0、親 0、熊 0、栗 0、米 0、年 0、波 0、山 0、指 0

(10) の通り、1 型の 2, 3 類名詞 23 語中 21 語までが助詞「の」によって核を消去される。以上のデータから、助詞「の」が後接する環境では 2 拍 2, 3 類と 2 拍 5 類の区別が概ね保持されていることがわかる。単語の単独言い切り形や「が」「に」など一般の助詞を付した文節のみの調査では、類の区別を全て洗い出せない場合があるのである。

5.3.2. 3 拍名詞の類別体系

続いて、中洞方言 (垂井式) と下半原方言 (内輪式) における 3 拍名詞の類と型の対応を示す。

(11) 3 拍名詞の類と型の対応²⁴

| 類 | 語例 | 中洞 (垂井式) | 下半原 (内輪式) |
|----|----|----------|-----------|
| 1 | 魚 | 0 サ[ガナ | 0 サ[カナ |
| 2 | 小豆 | 2 ア[ズ]キ | 3 ア[ズ]キ |
| 4 | 頭 | 2 ア[タ]マ | 3 ア[タ]マ |
| 5a | 心 | 2 コ[コ]ロ | 3 コ[コ]ロ |
| 5b | 命 | 1 [イ]ノチ | 2 イ[ノ]チ |
| 5c | 枕 | 0 マ[クラ | 3 マ[クラ |
| 6 | 鼠 | 0 ネ[ズミ | 0 ネ[ズミ |
| 7b | 薬 | 2 ク[ス]リ | 0 ク[ス]リ |
| 7a | 後ろ | 2 ウ[シ]ロ | 1 [ウ]シロ |

中洞方言の 3 拍名詞の類別体系は概ね 1・6 類=無核型/2・4・7 類=2 型または 1 型²⁵ (5 類まとまりなし)、下半原方言は 1・6・7b 類=無核型/2・4 類=3 型/5 類=2 型か 3 型/7a

²⁴ 3 拍 5 類の下位分類 (5a, 5b, 5c) は松倉 (2022: 192) が嶺北・加賀諸方言の比較に基づき設定した下位分類。北陸諸方言の共通祖語に遡る区別かと思える (日本祖語までは遡らない)。分節音の構造の違いを緩やかに反映しており 5a 類は「朝日、いとこ、心」など 2 拍目が無声子音、5b 類は「命、姿、涙」など 2 拍目が有聲子音、5c 類は「油、柱、枕」など 2 拍目が狭母音を含む。7 類の下位分類 (7a, 7b) は内輪式・中輪式諸方言の対応に基づく上野 (2006) の再構に拠る。

²⁵ 中洞方言における 3 拍 4 類名詞の分裂状況を示してみる。

1 型 余り、五日、項(オナジ)、扇、頭(カシラ)、鏡、敵、鉋、暦、白髪、住まい、住处、宝、谷間、俵、唾(ツバケ)、剣、峠、縫い目、林、袋、筵(ミシロ)

2 型 頭(アタマ)、団扇、厩(ンマヤ)、恐れ、男、思い、表、刀、言葉、境、硯、袂、包み、鼓、七日(ナヌカ)、匂い、願い、袴、鉢、光、響き、別れ

0 型 明日、軍(イクサ)、鮑、痛み、暇(イトマ)、潮、祈り、恨み、助け、頼み、渚、鯰、襖、仏、族
何らかの音韻条件に基づく分裂とは思われない。有標の型 (2 型) が徐々に所属語数を減らし無標の型 (1 型) へ置き換わっていく過程を反映しているか。

類＝1 型²⁶とまとめられる。5 類は類としてのまとまりに欠けるが、類内部の対応を精査すると、松倉 (2022) が福井県嶺北地方と石川県加賀地方の諸方言を比較し設定した 3 拍 5 類の下位分類 (5a, 5b, 5c 類) との規則的な対応が見えてくる。

(12) 3 拍 5 類名詞の所属型 (右横の a, b, c は松倉 (2022) に設定される下位語類)

a. 中洞方言

【2 型】 朝日 a、主、五つ a、いところ a、心 a

【1 型】 鮑 b、哀れ b、命 b、神楽 b、胡瓜 c、姿 b、襷 c、涙 b、錦、火箸、箒、紅葉 b、わさび a

【無核型】 油 c、親子、柘榴、簾、情け、茄子、柱 c、枕 c

b. 下半原方言

【3 型】 油 c、いところ a、心 a、襷 c、柱 c、枕 c、紅葉 b (2 も)

【2 型】 朝日 a、鮑 b、五つ a、命 b、姿 b、涙 b、紅葉 b (3 も)、わさび a

【1 型】 親子、神楽、胡瓜 c、箒

【無核型】 火箸

例外もあるが中洞方言では「いところ、心」など 5a 類が 2 型、「命、涙」など 5b 類が 1 型、「油、枕」など 5c 類が無核型に対応する傾向が見える。「5a 類＝2 型、5b 類＝1 型、5c 類＝無核型」という対応はこれまで石川県加賀市方言や福井市西中町方言に確認されていたが (松倉 2022: 191)、新たに大野市東部の垂井式方言の例が加わったことで、この 3 群の区別を北陸方言の共通アクセント祖体系に想定する仮説が補強されたと言える。

下半原方言では 5a 類と 5b 類の区別ははっきりしないが 5c 類が 3 型に対応する傾向が認められる。筆者の知る限り、5c 類が 5a, 5b 類とも 6, 7 類とも合流せず区別される (そして 2・4 類と合流している) 唯一の方言である。この対応が本方言のひいては内輪式の系統的位置付けに及ぼす影響については未だ検討が不十分であり本稿ではデータを提示するにとどめる。

6. まとめ

本稿では大野市東部 (大野市五箇地区、和泉地区) におけるアクセント・文法面の方言差を概観するとともに、五箇地区の垂井式アクセントと和泉地区の内輪式アクセントの記述・比較を行った。

石川県境に接する打波川流域方言 (特に上打波方言) と岐阜県境に程近い下半原方言に

²⁶ 下半原方言における 3 拍 7 類名詞の調査結果を示しておく。

1 型 後ろ、蚕、兜、辛子、鯨、便り、椿、鉛 (0 も)、緑、病

2 型 一人

3 型 畑

0 型 苺、薬、卵、鹽(タライ)、鉛 (1 も)

は、文法・語彙面で、県境を越えて隣接する石川県方言（白峰方言）、岐阜県方言との共有特徴が多数認められる。個々の等語線は必ずしも行政境界（県境）と一致せず、しばしば重大な境界線（垂井式－内輪式境界や買一タ／買ッタ境界など）が県境ではなく当地域内部を横切る。福井・岐阜・石川の三県境に接する大野市東部は各県方言の接触・漸移地帯にあたると言えるだろう。なお九頭竜川流域において垂井式と内輪式のアクセント境界は西勝原（垂井式）－下山（内輪式）間に走る。境界付近に中間的な体系は生じていない。

本稿では紙幅の都合もあり各型の所属語彙（アクセント資料）をほとんど提示できなかった。上打波（中洞）方言については別稿にてアクセント資料を公開する用意がある。併せて参照頂けると幸いである。

謝辞

調査へのご理解・ご協力を賜りました話者の皆様、大野市五箇公民館、大野市和泉公民館、大野市大野公民館の皆様に御礼申し上げます。

本研究は JSPS 科研費補助金（19J00755, 19H00530）、国立国語研究所共同研究プロジェクト「消滅危機言語の保存研究」の研究成果の一部です。

参考文献

- 牛山初男 (1953) 「語法上より見たる東西方言の境界線について」『国語学』12, 59-63.
- 上野善道 (2006) 「日本語アクセントの再建」『言語研究』130, 1-42.
- 金田一春彦 (1973) 「愛・三・岐・県境付近の方言境界線について」名古屋大学国語国文学会編『国語国文学論集：松村博司教授定年退官記念』785-806.
- 金田一春彦 (1974) 『国語アクセントの史的研究 原理と方法』東京：塙書房.
- 金田一春彦 (1977) 「アクセントの分布と変遷」大野晋・柴田武編『岩波講座日本語 11 方言』東京：岩波書店.
- 柴田武 (1950) 「揖斐川上流のアクセント」『文字と言葉』231-266, 東京：刀江書院.
- 柴田武 (1958) 『日本の方言』東京：岩波書店.
- 橘礼吉 (1997) 「白山麓の越境出作り一文書に見る白峰村白峰の事例一」『石川県白山自然保護センター研究報告』24, 43-56.
- 新田哲夫 (2005) 『金沢大学フィールド文化学 1 石川県白峰地方の方言特徴と方言テキストの語法』金沢：金沢大学文学部.
- 服部四郎 (1930) 「近畿アクセントと東方アクセントとの境界線」『音声の研究』3, 131-144.
- 平山輝男 (1953) 「福井県嶺北地方の音調とその境界線」『音声学会会報』83, 1-4.
- 平山輝男 (1954) 「福井県嶺北地方の音調とその境界線 その2」『音声学会会報』84, 21-24.
- 平山輝男 (1955) 「新潟県南部のアクセント境界線について」『音声学会会報』88, 17-18.
- 松倉昂平 (2022) 『福井県嶺北方言のアクセント研究』東京：武蔵野書院.

On the East-West Dialect Boundary in Ōno City

MATSUKURA Kohei

Keywords: accent, Fukui dialect, dialect boundary, Tarui type, Nairin type

Abstract

It has been known since Hirayama (1953) that the so-called Tarui type and Tokyo type (Nairin type) accent systems border each other in the eastern part of Ōno City, Fukui Prefecture. This boundary forms part of the significant demarcation lines in Japanese dialectology that defines in terms of accent the Eastern and Western groups of Japanese dialects. This study describes and compares the accent systems of two neighboring dialects located across this boundary and reexamines the distribution of accent systems in the eastern part of Ōno City. In addition, there are many major lexical and grammatical isoglosses (e.g., the isogloss *ko:ta* / *katta* ‘bought’) running through this area, which is close to the prefectural border between Fukui, Ishikawa, and Gifu, showing that this area constitutes a transition zone between the dialects of the three prefectures (and by extension, between the Eastern and Western groups of Japanese dialects).

(まつくら・こうへい 国立国語研究所)